

平成 21 年 4 月 13 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2005～2008

課題番号：17520042

研究課題名 (和文) インドのテキスト解釈学における文脈理論の基礎的研究

研究課題名 (英文) A basic study of the theories of context in the Indian exegetics

研究代表者

吉水 清孝 (YOSHIMIZU KIYOTAKA)

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：20271835

研究成果の概要：従来、クマーリラは文の意味認知過程を、単語の意味を積み重ねて文の意味理解に至るという、ボトムアップ型モデルで考えられてきたが、本研究は、クマーリラが「文脈による文の意味決定」というトップダウン型の認知契機を積極的に認めていることを明らかにした。またクマーリラが、聖典解釈学派の伝統に従いヴェーダの非人為性を擁護しつつも、読者はヴェーダ文から或種の「意図」を読み取ると認め、更に、その意図の担い手とはヴェーダを身体とする最高我であるという独自のヴェーダーンタ思想を説くことを発見した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	1,100,000	0	1,100,000
2006 年度	900,000	0	900,000
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,600,000	480,000	4,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・印度哲学仏教学

キーワード：クマーリラ、ミーマーンサー、文脈、意味、前提、意図

1. 研究開始当初の背景

インドの司祭階級バラモンの人々が築いた諸学派のうちミーマーンサー学派（聖典解釈学派）は、インド最古の宗教文献ヴェーダの伝統維持を図る保守的学派であり、そのテキスト解釈論は、これまでその煩瑣さのゆえに研究が敬遠され、インド哲学研究の「盲点」となっていたが、近年には、インドにおける宗教伝統意識の解明のために重点的に研究しなければならない対象であることが広く認知されるようになった。特にミーマーンサー学派を哲学学派として独立させたクマーリラ（600 年前後の数十年）は、保守的では

あるが独創的で合理的な思索を各分野で展開し、仏教など個人の認識能力を伝統よりも重視する進歩的思想と鋭く対立し、新たな哲学的問題領域を作り出した点が高く評価されている。

研究代表者は、過去の科学研究費補助金研究により、クマーリラの主著『原理評釈』(Tantravārttika) 第 2 巻の内容梗概、およびクマーリラに先行して聖典解釈の種々の技法を大成したシャバラの『ミーマーンサー・スートラ註』第 1-3 巻の論題ごとの梗概を作成しており、『原理評釈』第 3 巻の解釈理論の研究に着手できる段階に入った。

2. 研究の目的

聖典解釈学派では、単語もその意味も恒常な存在であり、更に、単語はその意味を恒常に表示すると主張する。しかし他方では、文においてどの単語が中心的な位置を占めるか、また個々の単語による意味表示のうちどれが文において意図されているのかは、一つの文内部で確定されるのではなく、文を取り囲む文脈からの影響を受けて確定されると考える。本研究は、『原理評釈』第3巻の第1章と第3章において、クマーリラがヴェーダ文献から実際にいかなる文を引用し、それを文脈により解釈する方法をどのように考えているかを明らかにする。

『原理評釈』第3巻は、クマーリラが自身の解釈理論を詳論する巻であり、特に第1章及び第3章では、「文脈」をはじめ、「前提」「発話者の意図」「含意」「所与性」「新規性」といった言葉で翻訳するのがふさわしい解釈用語が頻出し、いずれも文を周囲の文脈の中で理解するための技法として、行使されている。これらの解釈用語は、そのまま現代の言語理論、なかんずく近年発達の著しいプラグマティクス（語用論）の分野で盛んに検討されているものであるから、クマーリラが文脈理論の中で行使する諸概念が、現代の言語理論における概念とどれほど共通するものであるかも明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、『原理評釈』第3巻第1章及び第3章の内容梗概を作成しつつ、また底本とする Ānandaśrama 叢書版では使用されていない India Office 写本との照合を進めて異読を収集し、注釈 *Nyāyasudhā* での本文引用とも比べながら、これらの章でクマーリラが説いているテキスト解釈の技法を、次の3点に留意しながら解明する。

(1) 前提について： ミーマンサー学派考えるようにヴェーダが統一ある祭式体系の規範書であるのなら、テキストの文は単独で成立しているのではなく、同じ文脈にある他の文を前提することによって、初めて自身の意味を確立するはずである。そこでクマーリラが具体的にどのような文例を取り上げて、文を文脈内で理解する際にどのような前提の働きがあると考えているかを解明し、併せて、そこで言う「前提」は、現代言語哲学において種類分けされている前提概念のうち、どのような前提に対応するのかを確定する。

(2) 発話者の意図について： 発話者の抱く意図が発話文の文脈にどのように影響するかは、プラグマティクスの中心課題の一つである。しかしミーマンサー学派の立場で

は、解釈対象とするヴェーダは人間により作られたものではない独立自存の聖典だとされている。にもかかわらずヴェーダの文から「意図」を読み取るとはどういうことなのかという問題を、クマーリラが、ヴェーダ思想を援用しながら、どのように論ずるかを解明する。

(3) 意味論的全体論について： 現代の言語哲学では、一つの文の意味を理解するには、予めその言語に属する他の多くの文の意味を理解していなければならないという意味論的全体論が提唱されている。ミーマンサー学派では、テキストの全体性を支えるのはテキストの中の根本的部分を成す文の動詞の働きだとされているので、クマーリラが文脈理論と動詞の働きについての理論とをどのように関連付けているのかを解明する。

4. 研究成果

以下には、本研究の成果として期間中に発表された、研究代表者による主要な研究論文の内容を、発表年順に要約する。

論文“The Theorem of the Singleness of a Goblet (*grahaikatvanyāya*)”は、クマーリラの文の意味認知理論について、従来見過されていた側面を解明した。文の意味認知のプロセスに関して、クマーリラは、個別の単語の意味認知が先に起こり、それらが集積されて文意の認知に至るという、部分から全体へボトムアップ的に理解が進むという「表示されたものの連関」説の提唱者であると一般に認められている。しかしクマーリラは『原理評釈』の中で、文の中の単語はそれ自体では固有の意味を表示していても、前後の文脈により、その意味表示が意図されなくなる場合があることを認めている。例えば、文の中で手段を表わす名詞が単数で表記されていても、場面においてその名詞がいくつの個体を指すかが前後の文脈で既知となっている場合には、当該の文における名詞の単数は意図されていない。当該の文に先立って、その名詞を最初に導入した文が働いており、先行する文の意味理解が前提されたうえで、当該の文の理解に制約が加わってくるのである。つまりクマーリラは、文の意味認知において、全体から部分へとトップダウン的に理解が進む契機があることをも認めていたのである。そしてクマーリラが説いている「前提」は、現代哲学で考える前提のうち、論理的前提ではなく、語用論的前提の一種とみなしうるものである。

論文「「曙色」をめぐるミーマンサー的考察」では、実名詞と形容詞が共に具格で同格構文を形成する場合、動詞から見れば両者の働きは対等であって優劣がないので、実名詞に形容詞に対する主要性と動詞に対する

従属性という両義性を帰せることにはならず、動詞に対する従属性を表す実名詞の具格語尾の働きは同格構文と両立すること、また単一の文において、規定の対象が二つ以上あっても、それらが統一ある全体を構成している限り、一つの主題 (uddesa) に対して従属要素の全体を規定することが出来ることを明らかにした。

クマーリラは、「虚偽を語るべからず」という、祭主の斎戒の一つを定めたヴェーダ規定文は、祭式の文脈に留まって祭式の式次第の一部を定めていると解釈すべきなのか、あるいは祭式の文脈を離れて、人間個人の義務を定めていると解釈すべきなのかという伝統的な問いに、文中の定動詞は行為主体を表示するのか否かという詳細な議論をもって答えている。論文「祭式で虚偽を語ってはならないのは何のためか」は、クマーリラによる議論が、この問いにいかにして答えたことになるのかを解明した。行為主体の代わりに、意志的行為一般の形式である bhavana (現実化作用) が定動詞接辞の表示対象となることで、規定文の意味の中核に位置付けられたならば、規定文を他の規定文との関係の中に組み込んで、祭式の式次第の一部として、文脈の中で理解することの必要性が理解され、多くの儀礼行為を階層的に組み込んだ祭式システムの構築が可能となるのである。

論文「クマーリラによる定動詞接辞の表示理論について」は、クマーリラによるこの議論の主要部が「人称語尾により表示されるものは行為主体の数である」という主張の証明に費やされているのは、パーニニの文法体系が「能動態および反射態の動詞人称語尾は行為主体を表示する」という帰結を導くため、これに屈服しないように考案された、動詞の L 接辞規定と数表記の規定とを結合するというミーマーンサー学派の文典解釈を受け継いでいることを解明した。同時に、「定動詞接辞による bhavana 表示」が学派の標準説であったにもかかわらず、行為主体の数を表示することになった人称語尾の代わりに、bhavana を表示する接辞とは何であるかを、遂に明確にしていなかったことをも解明した。

論文 “Reconsidering the fragment of the B. rha. t. tika on inseparable connection (avinābhava)” は、クマーリラ研究の基礎となる彼の年代論の研究である。従来は「クマーリラは晩年にダルマキールティ論理学の影響を受けた」という E. Frauwallner の仮説が有力視されていたが、本論文は、クマーリラは晩年までダルマキールティのことを知らず、またダルマキールティは最初期著作でクマーリラの影響を受けていることを指摘した。

論文 “Kumārila’s Propositional Derivation (arthāpatti) without Pervasion

(vyāpti)” はテキストの文脈解釈に必要とされた論理の一端を解明した。インドには独自に発達した論理学の伝統があるが、どの学派でも三段論法的な名辞論理のみに取り組んできた。しかしクマーリラは、一つの個体に関する言明の組み合わせから別の言明を導出するという命題論理の可能性を、名辞論理とは別種の論理として提起したことを本論文で明らかにした。

論文 “Kumārila’s Reevaluation of the Sacrifice and the Veda from a Vedānta Perspective” は、クマーリラがテキストの文脈を重視する背景に、彼独自のヴェーダ思想があることを解明した。諸々の儀礼行為を関連付ける行為形式を聖典解釈学で「現実化作用」(bhavana) と言うが、クマーリラは後期著作で、定期祭における現実化作用の目的を、未だ存在しない咎を祭式怠慢により受けてしまうことの回避から、既に犯して存在する罪障を祭式により無化することへと転換したこと、さらに非人為のはずのヴェーダにおいて文脈により特定の意図を伝えようとする主体が存在するかという問いに、それは虚空にあらわれた音声テキストという身体に宿る「最高我」(paramātman) であると答えたことを明らかにした。またこの独自のヴェーダ思想を説くためにクマーリラが依拠するウパニシャッドが、『チャンドーグヤ・ウパニシャッド』であることを明らかにした。

ミーマーンサー学派では成立当初から、ヴェーダは誰にも作りだされていない永遠のテキストであるとされていたが、論文 “The Intention of Expression (vivak. sā), the Expounding (vyākhyā) of a Text, and the Authorlessness of the Veda” では、クマーリラは『原理評釈』の中で、ヴェーダの命令文から発話者の意図を読み取ることの可能性を、3通りに論じていることを明らかにした。まず「岸边が崩れようとしている」というように、精神をもたないものの変化を、精神をもつ存在の活動として、全く比喩的に表すことができる。また、人間界では、始まりのない過去世以来、どの世代でも、前の世代の師匠からヴェーダを伝授されて次世代に伝えるのだから、弟子は、ヴェーダ文の構造から読み取れる趣旨を、発話者として代々の師匠が伝えようとした意図として了解することができる。さらに、音声テキストであるヴェーダは虚空界において「最高我」が宿っている身体であり、ヴェーダから読み取れるのは、文字通りの意味で、最高我という発話者が発する意図と考えられる。クマーリラは、人為の聖典 (スメリティ) に含まれるヴェーダ補助文献を、文典的要素のあるストラと、それのないカルパとに分類する。いずれもタイトルに作者の名が冠されているが、ヴェー

ダにも『カータカ』など、タイトルに人名を含むものがある。同じく祭式文献でも、カルパ・ストラは人為のテキストであり、ヴェーダはタイトルに人名を含んでいても、その人物が作ったのではない非人為のテキストであることの一応の理由として、クマーリラは、カルパ・ストラは「作者が誰であるかの確固とした記憶」と共に伝承されていることを挙げる。しかしクマーリラがヴェーダを非人為の聖典だとする本当の根拠は、いかなる理由付けでもなく、ヴェーダのマントラを誦したときに覚える或る種の感動である。クマーリラは、リグ、ヤジュス、サーマンの三ヴェーダ冒頭のマントラを引用し、いずれも、人間に思いつくことができない情景を儀礼化し、世俗の言語には見られない荘重な表現で歌ったものであり、このような言明は人間のなせるものではなく、自立的なヴェーダがみずから発しているとした考えられない、と言う。神とも呼べる精神的存在をヴェーダの背後に想定していると言うことが出来る。

以上の諸研究により、クマーリラが、ヴェーダは単なる恒常不変の聖典ではなく、文どうしの階層構造をもつ全体であるとし、しかも語用論的見地から、人間個人が文脈に沿って如何にしてその構造を読み取っていくのかを考察していたことが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 14 件)

- ① 吉水清孝, “The Intention of Expression (*vivak.sā*), the Expounding (*vyākhyā*) of a Text, and the Authorlessness of the Veda,” *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 158, pp. 51-71, 2008, 査読有り.
- ② 吉水清孝, “Reconsidering the fragment of the *B.rha.t.īkā* on inseparable connection (*avinābhāva*),” B. Kellner, H. Krasser, H. Lasic, M.T. Much, H. Tauscher (eds.): *Pramā.nakīrti.h, Papers Dedicated to Ernst Steinkellner on the Occasion of his 70th Birthday*, (Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde 70), Vienna, pp. 1079-1103, 2007, 査読有り.
- ③ 吉水清孝, “Kumārila’s Reevaluation of the Sacrifice and the Veda from a Vedānta Perspective,” J. Bronkhorst (ed.): *Mīmāṃsā and Vedānta, Interaction and Continuity. Papers of the 12th World Sanskrit Conference*. Vol. 10.3, Delhi, pp.201-253, 2007, 査読有り.
- ④ 吉水清孝, “Kumārila’s Propositional Derivation (*arthāpatti*) without Pervasion (*vyāpti*),” K. Preisendanz (ed.): *Expanding and*

Merging Horizons. Contributions to South Asian and Cross-Cultural Studies in Commemoration of Wilhelm Halbfass, Vienna, pp.315-335, 2007, 査読有り.

- ⑤ 吉水清孝, 「定動詞の *kāraka* 表示論証とクマーリラによるその批判について」, 『論集』(印度学宗教学会) 34, 486-506 頁, 2007, 査読有り.
 - ⑥ 吉水清孝, 「祭式で虚偽を語ってはならないのは何のためか—定動詞表示と文脈—」 『印度学仏教学研究』第 55 巻第 2 号, 814-820 頁, 2007, 査読有り.
 - ⑦ 吉水清孝, 「クマーリラと『マハーバーラタ』の英雄たち」 『北海道印度哲学仏教学会会報』 21, 12-15 頁, 2007, 査読無し.
 - ⑧ 吉水清孝, “The Theorem of the Singleness of a Goblet (*graha-ekatva-nyāya*): A Mīmāṃsā Analysis of Meaning and Context,” M. Hattori (ed.): *Word and Meaning in Indian Philosophy, Acta Asiatica* 90, pp. 5-38, 2006, 査読有り.
 - ⑨ 吉水清孝, 「クマーリラによる定動詞接辞の表示理論について」 『印度哲学仏教学』 21, 298-315 頁, 2006, 査読有り.
 - ⑩ 藤井教公, 「『法華経直談鈔』の内容検討—『法華経鷲林拾葉鈔』との対比から—」, 望月海淑編 『法華経と大乘経典の研究』, 295-313 頁, 2006, 査読有り.
 - ⑪ 細田典明, 「『雑阿含』道品と『根本説一切有部毘奈耶薬事』」, 『仏教学』 48, 1-20 頁, 2006, 査読有り.
 - ⑫ 吉水清孝, 「「曙色」をめぐるミーマーンサー的考察」 『印度哲学仏教学』 20, 336-363 頁, 2005, 査読有り.
 - ⑬ 藤井教公, 「室町時代における『法華経』の唱導」, 『印度哲学仏教学』, 20, 1-13 頁, 2005, 査読有り.
 - ⑭ 藤井教公, 「明恵における神と仏」, 『宗教研究』, 79-2(第 345 号): 293-316 頁, 2005, 査読有り
- [学会発表] (計 6 件)
- ① 吉水清孝, 祭式のなかの神々—ミーマーンサー学派の立場から, 印度学宗教学会第 51 回学術大会, 2008 年 6 月 7 日, 宮城学院女子大学.
 - ② 吉水清孝, クマーリラによるパーニニ文典 2.3.1 の解釈について, 北海道印度哲学仏教学会第 23 回学術大会, 2007 年 7 月 28 日, 苫小牧駒澤大学.
 - ③ 吉水清孝, 祭式で虚偽を語ってはならないのは何のためか—定動詞表示と文脈, 日本印度学仏教学会第 57 回大会, 2006 年 9 月 13 日, 大正大学.
 - ④ 吉水清孝, クマーリラによる定動詞の語尾表示理論について, 北海道印度哲学仏教学

会第 22 回大会, 2006 年 8 月 26 日, 北海道大谷大学.

⑤ 吉水清孝, 「曙色」をめぐるミーマーンサー的考察, 北海道印度哲学仏教会第 21 回大会, 2005 年 9 月 10 日, 北海道武蔵短期大学.

⑥ 吉水清孝, "Reconsidering the *B.rha.t.tikā* Fragments on *avinābhāva* and *niyama*," 4th International Dharmakirti Conference, 2005 年 8 月 26 日, Vienna, Austria.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉水 清孝 (YOSHIMIZU KIYOTAKA)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号: 20271835

(2) 研究分担者 (いずれも平成 17—19 年度)

藤井 教公 (FUJII KYOKO)
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 70238525

細田 典明 (HOSODA NORIAKI)
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 00181503